【土木計画学研究・論文集 No.12 1995年8月】

観光都市京都における散策空間の整備*

Improvements of Promenade Spaces in Kyoto City*

和田章仁**・材野博司***

By Akihito WADA, Hiroshi ZAINO

1. はじめに

わが国においては近年の高齢化の急激な進行や週休2日制の導入などによる余暇時間の増大によって、国民のニーズの多様化・高度化に拍車がかかり、都市構造の変化や国民のライフスタイルに変化が生じてきている。このようなことから、生活に対するゆとりやうるおい、あるいは都市活動に対する気分転換や快適性が求められてきている。

このような都市活動の快適性を確保する方策のひとつに「散策」があげられよう。この散策は行き先や道筋、あるいは時間といった制約に縛られない自由な行動（散策行動）として都市生活の緊張をときほぐし、うれしさや楽しさの創出とともに、人々の健康増進にも寄与し、積極的に都市に生きるよろこびを感じさせるものである。

本稿は真に生活の豊かさを楽しめるとともに、都市環境のアメニティ形成に貢献する散策空間づくりの在り方を探ろうとするものであるが、もとより、そうした概念が確立しているわけではない。これまでの散策空間に関する既往の研究については、高口恭行の「散策空間の研究」[1]がある。この研究は散策をテーマにした興味深い研究であり、研究対象が散策行為および散策空間に対するものであるが、その中心は私的な考察および計画事例であった。また、鳴海邦碩・久隆浩らの研究[2]では住区内における散策のシチュエーチョンの分析から近隣空間整備の在り方、なかでも散策スポットの整備を提案している。一方、歩行者空間に関する既往の研究については、交通工学的なアプローチによる移動空間を研究対象としたもの[3]が主なものであった。これらと比較して本稿では、観光都市である京都における市民の散策行動に着目し、この散策行動の実態と観光客の訪問地からの分析をとおして質の高い散策空間の整備の在り方を検討しようとするものである。

本論の構成は次のとおりである。まず2章では、京都市域を対象として実施した散策実態調査を概説する。3章では散策実態調査結果により、散策行動の実態を把握する。次に、4章では散策行動を散策地までの距離により類型化を図るとともに、各散策地の性格を明らかにする。5章では京都市への観光客の訪問地と前章の散策地と比較・分析を行う。そして、6章では5章を受けて、快適な散策空間の整備に対する方策を検討する。

なお、「散策」とはとくにこれといった目的を持たずにブラッと出かけるいわゆる散歩のことであり、健康を目的とした早足歩きはこれに当てはまらないとした高口恭行[1]の定義もあるが、ここではウインドウショッピング、犬の散歩、幼児を連れての公園行きおよび健康を目的とした早足歩きなど、披験者が「散策」と判断した全ての行動を対象とした。

2. 実態調査の内容と方法

散策行動の把握については、人の動きの実態を把握する調査としてパーソントリップ調査などが主なものとしてあげられるが、これらは目的の明確な行動を主な対象としており、目的が明確でない散策行動の実態を既存のデータから知ることは困難である。このようなことから、良質な散策空間を有している京都市を対象として散策行動についてのアンケート

＊キーワーズ：観光・余暇、空間設計、歩行者・自転車交通計画
＊＊正員、工修、京都工芸繊維大学大学院工芸科学研究科
（京都市左京区松ケ崎橋上町、ＴＥＬ075-724-7645、ＦＡＸ075-724-7602）
＊＊＊非会員、工博、京都工芸繊維大学工芸学部造形工学科
（京都市左京区松ケ崎橋上町、ＴＥＬ075-724-7645、ＦＡＸ075-724-7602）

表－１　アンケート調査の内容

調査項目	内　　容
個人属性	・性別、年齢、職業 ・居住地（区および元学区）
散策頻度	・散策を行う、行わない ・散策頻度
散策行動	・以下の３種類に分類 「いつもと同じコース」 「とくに定まっていない」 「たまに行くとっておきコース」 ・上記３種類別の 理由、時間、散策先
散策コース	・自由記述

調査を実施した。

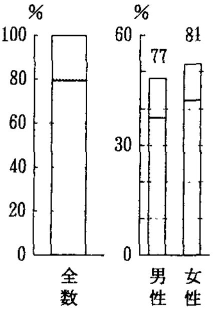
調査は1993年９月に京都市全域において、20才以上の成人を対象として訪問配布・郵送回収方式により行った。表－１にアンケート調査の内容を示す。総配布数は1,250 戸（１戸当り３票配布したので、票数としては3,750 票）で、回収戸数は２０7戸であった。そのうち有効回収戸数は２０2戸（有効回収率は16.2%）で、集計可能な有効票数は４０0票であった。

３．散策行動の実態

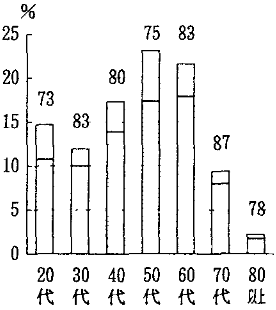
（１）散策の発生状況

散策アンケート調査の結果、回答者の約８割が年１回以上散策していると答えている。また、散策している人の性別では女性の割合が高く、散策する人としない人の割合（散策率）も女性が81%と高くなっている（図－１参照）。散策している人の年齢構成は、18%の60才代を中心に50才代、40才代と続いており、中高年の割合が多くなっている。また、散策率では70才代が87%、60才代、30才代がそれぞれ83%と高く、20才代、50才代は75%以下と低くなっている（図－２参照）。職業別の散策者は勤め人の28%を最高に、主婦、自営が続いている。散策率はその他が１００%、学生、無職が共に84%と比較的時間に余裕のある人々が高率である反面、自営は71%と低率である（図－３参照）。

一方、男女別の散策頻度は女性の「年数回」が約

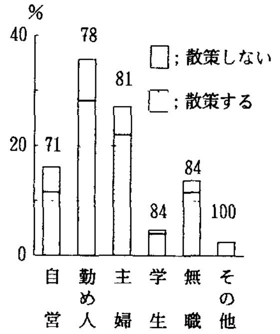


図－１　散策者の割合

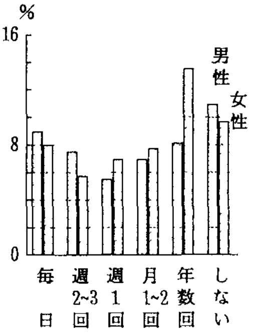


図－２　年齢別の散策者

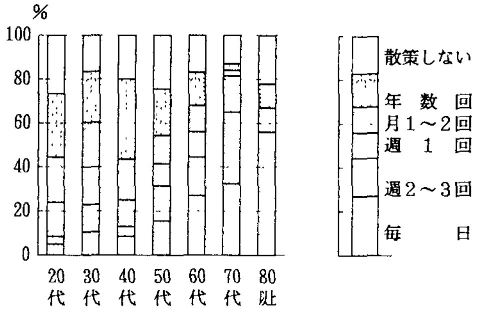
注）棒グラフ上の数値は散策者の割合



図－３　職業別の散策者

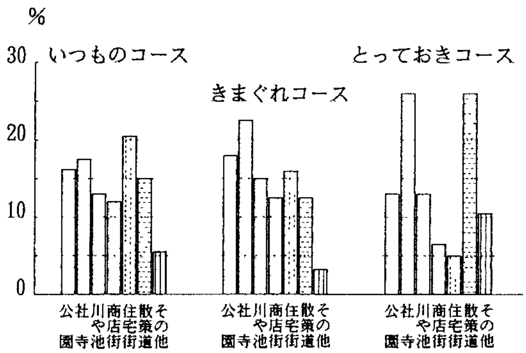


図－４　男女別の散策頻度

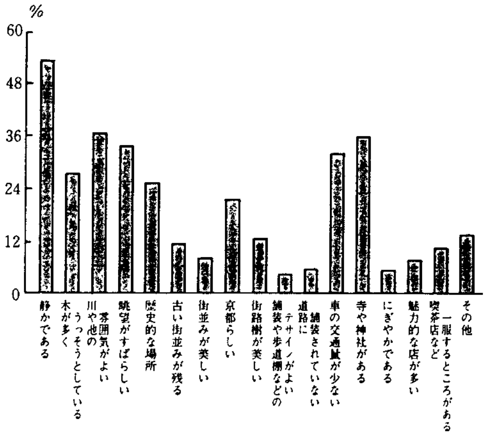


図－５　年齢別の散策頻度

14%と高い率の反面、男性の「週１回」が５.５%と低くなっている。また、「ほとんど毎日」「週2～3回」といった多頻度については男性が多く、頻度が低くなるにしたがって女性の割合が多くなっている（図－４参照）。また、年齢別の散策頻度は、概ね年齢が上がるにしたがって「毎日」「週2～3回」の多頻度の割合が高くなっている。この内、40才代では散策率は80と平均であってもこれらの傾向から異なっており、社会的、家庭的にも責任ある時期で、時間を多く取れない年代であることが推測されよう（図－５参照）。このことから、「男性」「高齢」



図－6　散策タイプ別の散策先



図－7　散策者が散策地に感じている魅力

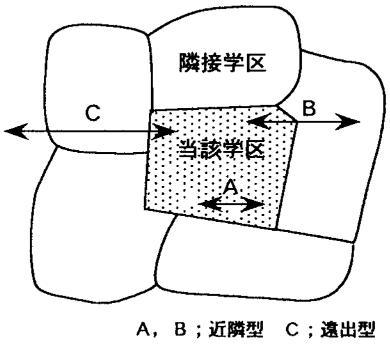
「無職」の条件に当てはまる人が、散策の頻度が高いことが判明した。

（2）市民の散策場所とその魅力

散策を行う場合に、人はそれぞれ異なった考えによってコースどりをしており、アンケートから「いつもと同じコース」「とくに定まっていない」「たまに行くとっておきコース」の3つのタイプに分けられる。これらを分かりやすいように『いつものコース』『きまぐれコース』および『とっておきコース』に表示することとする。実態調査結果によるこれらの3つのタイプの発生比率は、順に23%、63%および14%であり、きまぐれコースが過半数を占めていることから、散策の多くがその時の気分によりコースを変えていることがわかった。

市民が散策している場所を散策タイプ別にみると、『いつものコース』では「住宅街」が21%と比較的高いが、他は似たりよったりである。また、『きまぐれコース』では「社寺」が23%と比較的高いが、他はほぼ同率である。一方、『とっておきのコース』は「社寺」と「散策道」がそれぞれ26%と高い率を示しているが、逆に「商店街」と「住宅街」が低い率である。これらから、いつも定まったコースを散策する人は住宅街といった身近な場所を選んでいるものの、気まぐれにコースをとっている人と同様にあまり散策地を選択していないと思われる。一方、気に入ったとっておきのコースを散策している場合は、散策を楽しむための神社・寺院および散策道といった質の高い散策地が選ばれ、身近な場所である商店街や住宅街は敬遠されている（図－6参照）。

市民がこうした散策地に感じている魅力は、京都市都市計画局が実施した歩行者・自転車アンケート調査[4)]の結果から図－7のように整理されている。これによれば、「静けさ」が群を抜いており、次いで「川や池」「眺望」「寺や神社」「車の少なさ」が挙げられている。このように、市民が散策に求めている要件は、日常生活のなかで無くなりつつある『静寂さを主としたゆとりとうるおい』が挙げられよう。



図－8　散策距離の類型化

4．散策地への距離と散策空間

（1）散策地との距離の類型化

アンケート調査の結果、散策をすると回答した人のうち約55%（174サンプル）が散策地を記入している。この散策地までの距離を表すため、図－8に示すように散策行動の起点（ほとんどが自宅）から散策地までの距離によって、「遠出型散策地」（以

表－２　「遠出型」と「近隣型」の散策先

	遠出型	%	近隣型	%
1	嵯峨野	4.6	鴨川河畔	10.3
2	鴨川河畔	4.0	御所	5.2
3	嵐山	4.0	桂川河畔	4.6
4	宝ケ池・国際会館	4.0	松尾大社	4.6
5	円山公園	4.0	嵯峨野	4.0
6	清水坂周辺	3.4	鈴虫寺	4.0
7	四条河原町	3.4	嵐山	3.4
8	御所	2.9	下鴨神社	3.4
9	知恩院	2.9	桃山御陵	3.4
10	北野天満宮	2.3	北野天満宮	2.9
11	植物園	2.3	御室仁和寺	2.9
12	南禅寺	2.3	泉涌寺	2.9
13	平安神宮	2.3	伏見稲荷大社	2.9
14	八坂神社	2.3	宝ケ池・国際会館	2.9
15	下鴨神社	1.7	亀山公園	2.9
16	北山通	1.7	詩仙堂曼殊院	2.9
17	銀閣寺	1.7	きぬかけの路	2.3
18	哲学の道	1.7	金閣寺	2.3
19			植物園	1.7
20			北山通	1.7
			他	

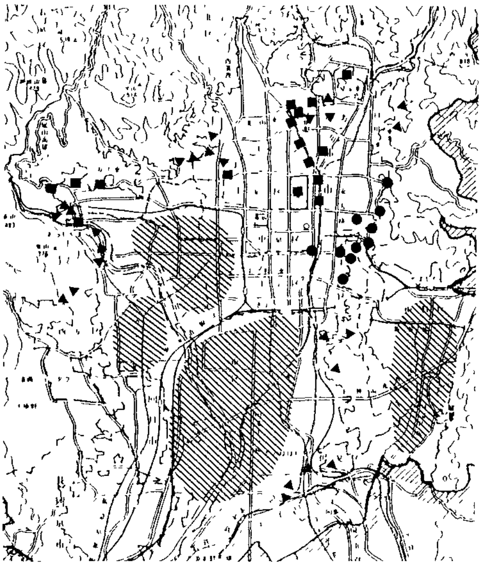
注）下線は遠出型、近隣型の共通の散策地

下「遠出型」という）と「近隣型散策地」（以下「近隣型」という）に類型化した。ここで、当該学区（小学校区）内々の散策（A）、当該学区とその隣接学区間の散策（B）の２ケースを「近隣型」とし、当該学区から隣接学区を越えた遠い学区との散策（C）を「遠出型」と定めた。

（２）遠出型と近隣型の特性

これら散策行動のうち「遠出型」と「近隣型」の比は４：６であり、「近隣型」が多いことがわかった。また、よく行く散策地としては、サンプル数を100とした場合の割合が1.5%以上のものとし、それらをタイプ別に集計した結果を表－２に示している。このなかには、世界遺産条約登録を受けた「古都京都の文化財」のうち、京都市内にある14社寺・城のなかの８箇所が含まれており、これら「遠出型」「近隣型」を問わずいずれの散策地も京都を代表する質の高い散策空間であることがわかる。

「遠出型」「近隣型」のうち共通の散策地は９箇所にのぼっており、これを「共通型」とし、これらの各散策地を市街図に表した（図－９参照）。この３つの型の特性は表－３に示した。



凡例　■；共通型　●；遠出型　▲；近隣型
（斜線）；散策空間の不足地域

図－９　　京都市街地における散策地

表－３　散策距離を考慮した散策地の比較

	特性
共通型	静けさを中心に、水辺、眺望、社寺といった散策の主な魅力のほとんどをもっている良質な散策空間である。
遠出型	ほとんどの箇所が東山山麓に立地している社寺、公園等であるが、四条河原町（繁華街）が例外である。
近隣型	東山、北山、西山の三山の山麓に位置していることから、市街地の周辺に分散している。

５．散策地と観光地の比較分析

（１）散策地と観光地の重なり

京都市を訪れる観光客は、年間で約4,000万人にのぼっている。観光客が訪れる数多くの観光地のうち、京都市観光調査[5]から1,363サンプルを100とした場合の割合が1.5%以上の訪問地は、清水坂周辺、金閣寺、嵐山など概ね京都市民が散策している

表－４　散策地と観光地のクロス集計表

		散策地					
		遠出型		近隣型		僅少	
観光客訪問地	多い	A	清水坂周辺、嵐山、御所 平安神宮、銀閣寺 嵯峨野、四条河原町 哲学の道、南禅寺 八坂神社、知恩院	B	金閣寺、嵐山、嵯峨野 竜安寺、天竜寺、御所	C	大原、東・西本願寺 鞍馬・貴船、 三十三間堂 東映太秦映画村
	比較的多い	D	円山公園、北野天満宮 植物園、下鴨神社	E	北野天満宮、詩仙堂 御室仁和寺、植物園 下鴨神社、東福寺 伏見稲荷大社	F	動物園、大谷廟 京都タワー、永観堂 保津川遊船、南座 市・美術館、高台寺 法然院、高雄、東寺 千本釈迦堂、大徳寺
	僅少	G	鴨川河畔、北山通 宝ケ池・国際会館	H	鴨川河畔、桃山御陵 桂川河畔、松尾大社 鈴虫寺、北山通、泉涌寺 亀山公園、きぬかけの路 御香宮、平野神社、疏水 苔寺、野宮神社、濠川 宝ケ池・国際会館 宝ケ池運動公園	I	

注）下線は遠出型と近隣型の共通の散策地

場所と重なっている。

（２）散策地と観光地の領域

散策地と観光地の関係を分析するため、散策地を「遠出型」「近隣型」の１.５%を越える箇所とそれぞれの型の１.５%未満の「僅少」の３種類と、観光客の訪問地として「多い」（５%以上）と「比較的多い」（１.５%以上５%未満）および１.５%未満の「僅少」の３種類に分けて**表－４**を作成した。ここで、「僅少」は訪問率が低く対象箇所も多いことから散策地、観光地とも記載していない。

この**表－４**から、散策地の「遠出型」で観光地の「多い」A欄にあるこれらの場所は、日本を代表する質の高い散策空間である。また、散策地の「近隣型」と観光地の「比較的多い」によって占められるB、D、E３つの欄にある場所も京都を代表する良質な散策空間である。散策地が「僅少」のC、F欄の観光地は東映太秦映画村や南座などの娯楽施設、大徳寺や永観堂などの有料観光地および大原、鞍馬など市街地から遠く離れている観光地であることがわかった。一方、観光地が「僅少」のG、H欄の散策地は鴨川河畔、宝ケ池・国際会館および北山通など他都市にもある散策空間であるのと、桃山御陵、鈴虫寺など公共交通機関のアクセスが悪い所およびきぬかけの路や疏水など散策空間として手を加えられていない場所である。

６．快適な散策空間の整備に向けて

（１）散策空間の不足地域に対する方策

散策空間の不足地域は、**図－９**に示しているように散策地および観光地がともに僅少な地域である。**表－４**での散策地、観光地の「僅少」のI欄であるこれらの地域を解消するためには、次のような方策を中心に散策空間の整備・創出を図る必要がある。

①散策空間は「静けさ・水辺・眺望・社寺・車の少なさ」といった魅力が主体となって構成されていることが明らかであることから、河川沿い、静かな公園などを軸とする散策道の整備をすすめる。

②自宅近くでの散策地を全市的に確保する必要性から、あまり知られていない散策資源を掘り起こすとともに、まちの賑わいなどの従来とは性格の異なる

散策空間の創出を図る。

（2）散策空間の広域化に対する方策

表－4における散策地の「近隣型」で観光地の「僅少」のH欄は、鴨川河畔などの「共通型」を除くと、ほとんどが近隣住民の手軽な散策対象地であり、たとえ有名な場所であっても市民が遠くから散策しにくる場所にはなっていない。したがって、全市的な広がりのなかで市民が散策を楽しめるようにすることが肝要である。このためには、次のような視点にたって快適な散策空間を創出する必要がある。

①互いに隣接する散策地を接続するための散策道を整備することにより、散策空間のネットワーク化の拡大を図る。

②アクセスの容易な公共交通機関を中心として近傍の散策地をつなぐ散策道を整備し、魅力ある散策空間の形成を図る。

③散策道の整備についてはベンチなどのストリートファニチュアーを設置し、高齢者などへの配慮を行うとともに、歩道の拡幅・美装化を図る。

7．結論

（1）快適な散策空間の創出に対しては様々な視点からの研究・分析が肝要であるが、本稿ではそのひとつである散策実態行動からのアプローチを試みた。これらから、次のような結果が得られた。

①散策行動の把握により、京都市民が社寺、公園、川や池および散策道を好んで散策をしていることがわかった。このことは、市民が散策に感じている静けさ、水辺空間、眺望、歴史的空間および車の少なさといった魅力と合致している。したがって、散策空間の整備にあたっては、これらのことに配慮する必要がある。

②散策行動の起点から散策地までの距離を「遠出型」と「近隣型」に類型化することにより、4：6の割合で「近隣型」が多く、それぞれの地域における手軽な散策を行っていることがわかった。また、「遠出型」と「近隣型」に共通の散策地は静けさを中心に水辺、眺望、歴史的空間といった散策の主な魅力のほとんどをもっている良質な散策空間であった。また、これらの散策地を市街地図におとすと、散策空間の不足地域が判明した。

③「遠出型」「近隣型」の散策地と観光地との比較分析を行った結果、次の2つの点がわかった。ひとつは散策空間不足地域を質的にみると、東映太秦映画村や南座など明らかに目的のある観光地や、大原など市街地から遠く離れている観光地などは散策の対象地でないことがわかった。次に、観光客の少ない「近隣型」の散策地を詳細にみると、桃山御陵、鈴虫寺など他の散策地と離れた交通の便の悪い所に存在している散策地あるいはきぬかけの路や疏水など散策空間として手を加えられていない場所であることが判明した。

（2）快適な散策空間の整備に向けては、次のような方策が必要と考えられる。

- 質の高い散策空間は、静けさを中心とした快適性が主体となった魅力により構成されている点に留意し、その整備をすすめる。
- 隣接する散策地を良質な散策道で接続することにより、魅力ある散策ネットワークの形成を図る。
- 身近な、あまり知られていない散策資源を掘り起こすとともに、賑わいを楽しむなどの従来とは性格の異なる散策空間の創出を図る。

参考文献

1）高口恭行：散策空間の研究，京都大学学位論文，1973.
2）鳴海邦碩・久隆浩・藤原啓太：住宅地における近隣散策空間の研究，日本建築学会近畿支部研究報告集，第34号計画系，pp. 845～848, 1994.
3）例えば、塚口博司：歩行者交通空間の計画に関する基礎的研究，大阪大学学位論文，1981.
4）和田章仁・打田剛生：京都市民の散策空間と散策行動，日本建築学会近畿支部研究報告集，第33号計画系，pp. 609～612, 1993.
5）京都市文化観光局：京都市観光調査年報，P. 34, 1994.

観光都市京都における散策空間の整備

和田章仁・材野博司

近年の週休2日制の導入などによる余暇時間の増大によって、都市生活に対するゆとりやうるおいが求められてきている。このことから、本研究では、真に生活の豊かさを楽しめる都市空間の創出を図るため、観光都市である京都における市民の散策行動に着目し、散策空間づくりのあり方について検討を行った。その結果、市民が散策している空間と観光客が観光を行っている空間はほぼ等しく、社寺、公園および川や池などが対象となっていることがわかった。これにより、静けさを中心とした快適な散策空間の整備の必要性を提案した。

Improvements of Promenade Spaces in Kyoto City

Akihito WADA・Hiroshi ZAINO

The purpose of this study investigates an ideal method of promenade space contributing to the formation of comfortable urban environment. Then, we examined how prpmenade behaviors reflect to improved promenade space by elucidating a happened mechanism in promenade behaviors and sightseeing places. As a result, it is obvious that both Kyoto citizens and sightseers promenade temples, Shinto shrines, parks, rivers and ponds. And we proposed that it is necessary to improve amenity by the silence in promenade space.